

## 「第 34 回議会報告会」に関するアンケートまとめ

---

---

### 【質問①】 講演を聞いた感想

---

---

・コロナ禍における議会の対応を、充実させていかなければならない重要性を再認識できた。市民と接することが難しいなか、切実な意見をどのように把握していくか、非常に悩ましい。集約し易い仕組みを確立して、それに基づく効果的な議論を駆使して、有事の際に市民が必要としている政策や意思決定を迅速にできる法制度が求められていると痛感した。今後とも、しっかり状況を見極めた的確な対処をめざしていきたい。

・議会はコロナ禍でどのように市民と向かい合うかで、議会対応は先生が言われるように課題は明らかになってきたように感じました。IT/ICTの活用を私自身が使いこなせるようになり、市民の方々の話し合いの機会を作らなければと感じました。

・コロナ感染症や自然災害など発災時において、議会は如何に合議で意思決定を行うかと題して、龍谷大学土山希美枝教授の講演から知立市議会としてどう対応するかについて、①「ゆっくりやってきた災害」としてのコロナ禍、②「対面で話し合えない」状況と議会の対応、③「議会として果たすべき責任」とその対応、④「議会として」どう市民と向き合うか、⑤「議会の活動を伝え」市民との関係を構築するために、5項目に分けて講演を聞いた。誰もが経験した事ない状況であることから社会は一斉に「自粛」ムードが広がり議会運営も同様である。こうした中一気に広がりを見せたIT/ICTである。土山先生はこれをどう活用するか、活用出来るかが課題で、慣れる事、「最初の1回の壁」をどう乗り越えるかである。足並みの不揃いは歪めない現実。出来ることから踏込めばよい。このような講演内容に少し楽しさも見えてきた。

・議会として市民とどう向き合うか、いわゆる災害時（コロナ禍中）の議会対応だが、行政の邪魔をしない、では議会は、そして議員は何をするのかと題した土山先生の講演から感じ取った主な事柄は、新型コロナウイルス感染症の拡大、拡散から1年を経過した中で取り組んできた「自粛」一色の議会運営が市民に理解と信頼はゆるぎなかったかどうか検証が必要である。これからの議会、そして議会人としてはIT/ICTをどう活用するかである。まずは「最初の1回の壁」超えをどう克服するかが課題。慣れないリモート会議、テレワークなどを駆使した議員間交流を手掛かり（突破口に）として、出来るものから始め、ならではのメリットを探ることも良いことである。先生の講演というよりも先生のお話を都合のよいとこ取りした自身の思い込みが強く出た感想です。

・議員の役割を再認識することができ、またコロナ禍での議員活動の在り方、そして災害時のIT/ICTの活用方法等、とても有意義な講義でした。

・土山教授の講演はいつも大変勉強になります。コロナ禍において、集合して対面で話し合うことができない状況が今後続き、たとえコロナが落ち着いたとしても、基礎疾患があるなど対面が難しい市民が相当いることと、コロナ後の感染症等に対応するため、対面で会えない状況に代替手段を用意する必要性が高いということは、このコロナ禍の1年で痛感しました。そこでICTの活用が急速に進んできたわけですが、オンラインは直接対面との完全な互換にはならなくとも、全く利用しないよりはオンラインでできることもあると思いますので、コロナ後の新しいツールとして、今から始めていかなければならないことだと感じています。対面とオンラインを併用し、市民とどう向かい合っていくのか、今後取り組んでいかなければならないと考えています。また、有事の際は、「議会」としての役割が大変重要になってきます。平時から「議会」としてのまとまりの下地を築いておけるといいのではないかと思います。

・対面出来なくなる代わりにIT/ICTツールを使えば出来なかった若い人達にも参加者増が見込め、議会に対し関心が高まっていくと思われる。

・人との接触の機会を奪われていくジレンマの中、不安がいっぱい膨れ上がる環境。どう行動していくのか？あらためて考えさせられ、多くの事を気づかせてもらう事ができました。市民への向き合いかた、寄り添いかた、まだまだ、これからだと。他の自治体の例が、とても参考になりました。

・コロナはゆっくりやってきた災害という事で、今後も被害が長く、だれもが被害者になりえる事を、改めて実感しました。議会としてどうやって市民と向き合うかについては、緊急時だからこそ議長を中心とし、行政の邪魔にならないように情報処理を一本化することが重要だと改めて実感しました。

・有事の際に「議会として果たすべき責任とその対応」について、これまで先生からご指導いただいた、「話し合いの場」としての議会の役割の重要性を再認識した。議論の場としての議会活動（質疑や討議）の回復は早かったが、市民との意見交換の場の回復が遅いのは、その重要性が議会で共通認識されていないからであり、主権者である市民の議会活動への参画の重要性について、これからさらに協議が必要と再確認した。

「コロナばらまきを止める」については、当局の政策形成過程に議会は参画していないため、出てきたものに対しての「賛否」を問われることになるが、「ポピュリズム」的な政策に対して、議会として向き合うためには、感傷的な意見ではなく、エビデンスに基づく議論ができるような調査や専門的知見との連携が必要である。

・土山教授の講演をお聞きし、たくさんのお話を学ばせて頂きました。市民との関係を構築するためについては、何の為にどの事を常に意識し人々との関係を繋いでいく事の必要性 Public Relation としての広報については、議会だよりの充実、ハガキを活用しての市民との意見交換の実施、ICTの活用については、最初の1回の壁をどう乗り越えるかがポイントになるとの事以上の3点を強く感じました。

・社会情勢の変化に即応した対応が必要。対面で議論できない中で、やはりオンラインで協議等ができる環境を整えることが必要。

・他の先進事例を聞いて参考となった。議会報告会を中止する所が多くみられ、当市も中止された経緯があるが、コロナ禍において今後どうしたらできるかを議論すべきと思う。

・土山教授の講演を聞いて、コロナウイルス禍中の全国の議会におけるアンケート結果に基づく話が聞いたことが良かった。対面で話を伺う議員として、様々な市民がいる中でどのように意見を伺うか？私は代替手段の用意ができていなかったころを改めて実感しました。講演中にあった、議会報告会が不要不急の行事なのか？議会への傍聴が不要不急なのか？考えさせられました。

・災害時における首長の統制と、そのチェック役となる議員。行政運営のスピード感と民主的市政運営との乖離、また今回の議会機能の制限に、コロナ禍で窮状する市民からの切実な訴えを浴びせられる議員は、議会機能制限の中で立ち往生し自身の責務が果たせていないのではと苦悩することとなった。

コロナ禍での自粛という同調圧力。二元代表制の一翼を担う議会・議員という立場をおざなりにし、思考停止的に自粛に身を寄せることは、結果、民主主義の否定に加担していることを議員自身しっかりと認識しなければならない。

民主的で市民のための真の自治を実現するのであれば、どこまでいっても議論し尽くすことにかぎる。特に非常時においては、独断専行ではなく、民主的に落とし所を見つけるために議会は力を注がなければならない。

今回の議会ICT化の成果の一つとして、話し合いの場をいつでも設けることができることがある。このことは、非常時における民主的市政運営の確立のための重要施策であったことを再認識した。多様性を認め民主的に物事を進めるということは、物事の決定に時間がかかるということだ。その点、ICTを活用し効率的な議会運営、議論の場の設置が可能になったことは大きな成果である。

・コロナ禍の中、議員・議会と市民がどのようにコミュニケーションを取ったら良いか丁度悩んでいたところ、議会だよりにハガキを付けるなど目から鱗のヒントをいただけて勉強になった。

---

---

## 【質問②】意見交換等を行った感想

---

---

・昨年からのほぼ1年にわたるコロナ禍の厳しい状況のなかで、色々な議員の活動や悩み、工夫など意見交換を通じて、知ることができて有意義だった。議会の制度充実を図ることと併せて。個々の議員としての活動の充実を図ることは、議会（議員）の使命である。今後ともコロナ禍において、市民の命と暮らしを守りぬくため、しっかりと邁進してゆく。

・議会の最大の目的である住民の福祉など、今後の議会の仕組みづくりが課題。又、自粛という言葉の重さに行動の制限をかけていることは、解決していかなければと感じました。

・拡散、拡大の様子が想定不可能なコロナ禍においては、まさに姿の見えない未曾有の大惨事と言える。地震や台風など自然災害を想定し、取り組んできた議会BCPを基に市議会議長のリーダーシップの下、住民代表機関である議会が迅速な意思決定と多様な市民ニーズを反映せねばならない。しかしながら議員一人ひとりがおかれる状況に大きな違いが生じることは間違いない。これから幾度となく場を踏むことから役割が定まるものであろう。

・本来議会は合議で意思決定を行う機関である。議論する対象が具体化され議員が集まって場が整う必要があるのだが、災害時の議会対応は、発災間もない時点においてはそれどころでは無く、議員一人ひとり異なる現場に居り、そして現場を持ち災害状況やその後の対応も全く異なるであろう。多様な現場で、様々な問題、課題に直面する、こうした事態が進行形で起こる事が想定されます。そうした幾通りもの問題を議会事務局や行政に持ち込めば確実に混乱を招きます。まったくもって処理不能な状況に陥ることでしょう。こうした時こそ、二元代表制の趣旨に基づいて議事議決機関として、また住民代表機関としての議会が迅速な意思決定と多様な市民ニーズの繁栄に資するとする組織体制や議員の行動基準を定め、より議長の強いリーダーシップの下、議会として決め、議会として振る舞う。そのことによってスピーディーな対応をしたい行政の支えとなる。「議会自治」とはこうした事であろう。

・自分だけでなく、どの議員もコロナ禍で「集合できない」、「対面できない」等の環境下におかれ、議員活動に苦労されていることが分かりました。

・コロナ禍での悩みや情報を共有することができ、大変有意義な意見交換でした。こういった機会を持つことで、「議会」としての意識やまとまりができていくきっかけになるのではないかと思います。

・コロナ禍の下において市民の方と話をしているとついつい議会や市政の話よりも家庭プライベート愚痴を聞くことになってしまった。

・グループワークとして、あらためて議員間の話し合いが、新鮮でした。またコロナ禍において、みんな悩んだりしていた事柄が同じようで、同感できたり、参考になったりと、本音が聞けて、とても、良い時間であったと思います。

・議員としてコロナ禍でできたことについて意見交換した結果、コロナだから活動できないのは言い訳にならない、三密を避け、コロナ対策をした上で話し合いの場を持ち意見を聞くことが大切で、どうしても会えない場合でも、電話やネットでの対応も可能な限り市

民に寄り添った対応が重要という認識で一致した。

・小グループでの意見交換は、「コロナ禍でそれぞれの議員が何を思っていたか」を聞くことができ良かった。時間が許せば、それぞれの発言に対して自由討議を行うことで、課題について共有を深めることができたと思う。自由討議の習熟は、知立市議会の今後の重要課題。

・緊急事態宣言の中、市民の方との対面でのやりとりができず、戸惑うことが多かったです。たくさんの御意見をお聞きし参考になりました。

・コロナ禍において如何にして情報を共有するのか。何を必要とし何を求めているか、待っているのではなく、出向くことも必要。個々の活動だけでなく、グループ（委員会、校区等）で活動することも必要。

・同じ市の議員なので、思いを共有できた。

・会派外の議員同士で意見交換できたのは有意義であった。政策が違う、町内が違うなど異なる点も多いグループでしたが、市民や属しているグループや団体とどのように接しているのかを知ることができた。特にコロナ禍という有事において、市民からの議員に対する評価、考え、そして市民に対する対応を知ることができました。また、グループの議員4人ともに今の議会報告会形式に対する問題が共通していたことが一番驚きました。

・コロナ禍において市民ニーズを調査しようとしても、三密制限が強く意識されるため、より多くの意見聴取が難しい状況にあった。個別要望は聴けるものの、集団としての意見をまとめにくく、真に求められるニーズを取りまとめるのにどの議員も苦勞している。しかしながら、コロナだからと諦めてしまえば、更なる政治不信を招きかねない。私たちはコロナ禍においても継続的な発信に取り組んでいかなければならない。

・みんな悩みは一緒だと思いを共有できた。議員だけでなく、市民もSNS等を利用した相互の意見交換ができる仕組み作りが必要だと思った。

---

---

### 【質問③】 その他、全体を通しての意見・感想

---

---

・コロナ禍（有事の際）だからこそ、ICTを活用した議会運営の必要性や重要性を改めて感じている。実際のオンライン会議への参加や、タブレットやスマホ等を扱っているうちに、正直なところ、苦手意識も徐々に消えてきた。遅れを取らないように努力して、タブレット端末を十分に活用して、市民に対しての迅速な情報提供や説明責任を果たしながら、効果的なツールの運用のうへの制度導入や政策決定に繋げることのできるように、全力で取り組んでゆきたい。

・議会事務局のみな様、ありがとうございました。「ICTの大きな壁を少しずつですが乗り越えなければなりません。」と痛感しました。市民との対話や市民との意見交換の方法を知ることができました。

- 発生間もないころはそれどころではない、先ずは家族の安否確認である。
- 暫くして、周りに目をやり地域の様子を調査する。
- 議員一人一人は異なる現場を持ち発災時の状況や、その後の対応も異なる。
- 議員それぞれ多様な現場に様々な課題問題が進行形で起こりうる。
- 身の回りの課題を議会事務局や行政に持ち込めば確実に混乱を招く。
- 周辺市はじめ、全国の先進事例を見ながら勉強会を積み重ねることに尽きる。

・世界中に新型コロナウイルス感染症が拡散、拡大し全く収束の兆しの見えない状況にあります。人類未曾有の大惨事と言えましょう。だからこそ議会として、議会人として果たすべき責任とその対応についてチーム知立市議会として、永田議長の強いリーダーシップの下、土山教授の先進的ご指導を仰ぎつつ、一定の目標達成を図るべきであろう。

・はじめてZoomを活用してのWEBによる報告会開催ということで、事務局の皆さんにおかれましては、大変お疲れさまでした。ありがとうございました。今後、議会もペーパーレスになりますし、オンライン会議等、IT/ICTを利活用する機会が増えてくるのは確実ですので、少しでも早く機器・ソフトに慣れ、使いこなせるよう、一つひとつ知識・技術を習得していきたいと思えます。

・インターネット接続や機器の準備等、事務局さんには大変大きな負担をかけてしまい、申し訳なく思っております。また、土山教授にご協力いただき、今回初めてのオンライン研修会を実施することができ、最初の1回の壁が突破できたのではと思います。今後、オンラインでの研修の機会を増やしていけたらと思っています。

・オンライン操作に慣れてしまえばと切に感じる事が出来た。

・市民不参加の報告会となってしまったことは、とても残念でしたが、Zoomを使っの初めての開催。反省点、検証して、これからの報告に活かしていきたいです。

・今回Zoomを活用した議会報告会でしたが、思っていた以上に充実した報告会になったと思えました。今後はネット環境をもっと充実させて、市民と一緒に参加出来るようにすべきと思えました。

・オンライン研修について…オンラインをモニターで傍聴するという変則的な形式だったが、貸与した個々のデバイスで参加することで、参集の必要性もなくなる。講師の負担も少なく、経費も節約でき、今後はオンライン研修や視察を積極的に活用すべき。

・今回は先生の有償アカウントをお借りして実施したが、無償と有償では機能が全く異なるので、市（議会）としてもぜひ有償アカウントは取得を求めたい。①時間制限 ②参加人数制限 ③ブレイクアウトルーム作成 ④YouTubeのLIVE配信連携、など、無償と有償の違いは大きい。公式会議を開催する想定があるなら必須アイテムであり、必要経費である。

・議員のみの開催について…今回はコロナ禍、議会のデジタルデバインド故に議員のみとなったが、議員全員がオンラインできれば、会場のキャパには余裕があったので、今回の形式であっても議員20人×1グループ市民3人の80人の研修も可能であった。また、有償アカウントであれば全員がオンライン参加でもウェブ上でグループ討議も可能である。

・議会としての責務を果たすために、これまで10年間行ってきた議会改革の基本である「市民に開かれた議会」「議員が行動する議会」「議員が議論する議会」という基本原則に立ち返り、この1年間で振り返る良い機会となった。

① 「市民に開かれた議会」としては、コロナ禍でも議会を市民に公開することの重要性を再認識するとともに、議会報告会等の市民との交流の機会を担保することへの意識の低さ（議会の責務として市民参画が二の次になってしまっている）を再認識した。

また、情報公開や意見交換の代替手段として、オンライン等の活用について、今後は積極的に活用していくことが求められる。

② 「議員が行動する議会」としては、有事の際こそ行動したい議員と、活動自粛要請の中で議員の活動範囲について、認識に個人差があり当初混乱が見られた。議長、事務局を中心としたBCPの適正運用と、組織としての災害対策会議の活用について、引き続き検証が必要。

③ 「議員が議論する議会」としては、個々の議員や会派としての気付きを、議会としての「行政チェックや政策提言」につなげていくことが肝要。少しずつ環境が醸成されつつも、まだまだ意識差があり、合議体である以上、全体の意識が変わっていかないと、組織としての機能強化は進まない。「質疑」→「自由討議」→「修正・提言」や「委員会の所管事務調査」→「政策提言」の流れがスムーズに進む体制づくりが、議会の機能強化として必要。

・あくまでタブレットやオンラインは手段であって、有事の際でも「公開を止めない」「活動を止めない」「議論を止めない」ために有効であるが、平時の際の「公開」「行動」「議論」が活発に行われていてこそその手段なので、議会の本質の機能向上について、引き続き協議が必要である。

・現在、新型コロナウイルス感染症が私たちの生活に多くの変化をもたらしています。その一つの変化が「オンライン」ですが、学校でもプログラミング教育がスタートし多くの方がICTでのつながりをはじめています。しかし幅広い世代を超えた市民ニーズに応えるためには、多種多様なツールの必要性を感じています。

・今後、実際に本会議など参集できない、想定すべき最悪の事態を考慮し、リモートによる模擬委員会の開催やオンライン研修をするなど、慣れるまで行うべきと考える。今後、昨年中止した高校生議会だが、コロナ禍でもできるように工夫して開催できるようにした

い。ICT化は、議会活動、議員活動の一つでしかないが、事が起きた時、また平時においても最大限に活用できることが今後望まれる。

・コロナ禍中の議会報告会であったため、市民参加無し・土山教授もリモートでという形式にコロナ禍中であるから仕方がないと思いますが、満足できない部分が正直、多かった。まず、リモートという部分に相手の熱やこちらの考えがうまく伝わっているのか？が不透明だった。これは【質問1】にも通じますが、代替手段であるリモートに慣れていないせいなのか？わかりませんが、今後の報告会に限ったことではありませんが、リモート形式に違和感があります。次に、市民参加できなかったことについて、今回のテーマが「コロナ禍中、議会ができること、すべきこと」でありましたが、市民の反応が見てみたかったです。コロナ禍中において議会や議員をどのように見ていたのか？何を望んでいたのか？知立市民から聞く機会ができたらと感じました。

・激しい政治対立を引き起こしている議会では、個々又は会派の利益に走り、多様性を否定し市民不在の市政運営となってしまう。その点、多様性が認められ胸襟を開いて議論を交わすことが可能な知立市議会に所属させていただいていることに感謝します。これは単に議会改革特別委員会での議論の積み重ねが大きいと感じていることです。

・毎回新しい視点で勉強できるので、大いに満足できた。できれば市民も入れてやりたかった。